

教員の対話から考える保育者養成と多様性Ⅱ

ー【座談会】おもしろがるという視点のもつ可能性ー

茂木 克浩 林 恵 五十嵐 元子 井上 昌樹 高松 智行

Teacher Dialogue: Exploring Early Childhood Educator Training and Diversity through Conversations Ⅱ

ー【Roundtable Discussion】The possibilities of a perspective that enjoys humorー

Katsuhiko MOGI Megumi HAYASHI Motoko IGARASHI Masaki INOUE Tomoyuki TAKAMATSU

Abstract

In this study, we examined the thoughts and attitudes of teachers behind the creation of a space that proved the hypothesis that "people may be connected by perceiving (a person's sensibility or expression) as 'humorous'" by using records of the round-table discussion. The aim was to obtain hints for connecting diverse people from the results.

Several points were identified in the round-table discussion. The basis for these was found to be the point of "recognizing the fundamental existence of each individual." It was also inferred that in current school education, "teacher-likeness" and "student-likeness" are required, and the diversity of each individual person is not recognized. In order to break this current situation, it is necessary to cultivate an atmosphere where each individual's uniqueness can be shared and appreciated with humor, and educators need to be prepared to support this.

Keywords: Roundtable Discussion, Student Diversity, Dialogue, Relationship Building, Humor

1. 目的と方法

(1) これまでの背景と対談の目的

本論の筆者である茂木、林、五十嵐は、ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）の概念が注目を集め、保育現場においても統合保育からインクルーシブ保育へと考え方が変化しつつある中で、保育者養成校はどのような理念に基づいて対応をしたらよいかについての座談会を行い、その成果を「教育の対話から考える保育者養成と多様性ー【座談会】人との関係をどう構築するかー」としてまとめた¹⁾。この座談会を通して「人と人との関係や集団は、決してできないところを埋めて補完し、まるく収めることではない。互いの『感性』と『表現』を『面白い』と感じ、かかわりあいの中で自分たちなりの形

を創造し続けることである。そのためにも『感性を磨く』ということが肝要である。」ということが立ち上がってきた²⁾。また「(その人の感性や表現を)『面白い』と感ずることで、人と人は繋がれるかもしれない」という仮説が生成された³⁾。

ちょうど先の論文が刊行された2024年3月に、茂木ら3名と本論から共著者に加わった井上の4名で、同じく共著者の高松が勤務する通級指導教室を訪れる機会を得た⁴⁾。校舎の中はそこで過ごす子ども(と、少しの大人)の痕跡で埋め尽くされており、まさに先の座談会で我々が注目した「面白さ」にあふれる場所であった。前回の座談会で「(その人の感性や表現を)『面白い』と感ずることで、人と人は繋がれるかもしれない」という仮説を立てた茂木、林、五十嵐にとってそこは、その仮説を実証したような場所であった。結果として訪問した4名は強い衝撃

を受け、大きく価値観を揺さぶられることになった。

本論では、そこで衝撃を受けた4名に高松を加えた5名で座談会を行いその会話の記録から、「(その人の感性や表現を)『面白い』と感ずることで、人と人は繋がるかもしれない」という仮説を実証したような場所が生み出されたその背景にある考え方を明らかにすることによって、多様な人々が繋がるためのヒントを得ることを目指す。

(2) 対談の方法

対談に参加した5名の背景は以下のとおりである。なお茂木、林、五十嵐については、先に上げた論文に掲載したものとはほぼ同じになっているが、今回の座談会を理解するために必要な情報であるため再掲する。

茂木：足利短期大学こども学科所属 専門は美術教育。「多元的共生社会の実現に向けて美術教育は何ができるのか」を大きなテーマに掲げて研究を行っている。これまでにALS(筋萎縮性側索硬化症)当事者やセクシュアル・マイノリティ当事者と協働で美術科の授業題材を開発してきた。

林：作新学院大学経営学部所属 専門は特別支援教育。保育の場におけるマイノリティについて研究を進めている。保健センターや児童相談所、特別支援学校での職を経て、現在は教員養成に携わっている。

五十嵐：白梅学園大学子ども学部所属・足利短期大学非常勤講師。専門は臨床発達心理学。保育現場の巡回相談に携わりつつ、子どもや保育者との対話とインクルーシブ保育について研究を進めている。

井上：育英短期大学保育学科所属 専門は美術教育。小・中学校教員経験を経て現職。合理性に偏りがちな教育に対し差異や未規定性を基盤とするアート教育の可能性について幅広く探究する。アナログとデジタルを融合的に捉えた教材開発を通して実践的に研究を進めている。

高松：神奈川県公立小学校教諭 / カマクラ図工室所属 小学校教員の傍ら、社会を図工室に見立てた「カマクラ図工室」でアーティストと共に小中学生の「未定調和」の旅をサポートしている。現在は、ことばの教室の教員として、子どもたちの「違い」をユーモアに変えて、誰もが安心できる教室づくりを試みている。

座談会はオンラインシステムを使用し、おおよそ100分間実施した。なお会話内容が多岐にわたり分量が多いため、本論のテーマに関連性のある部分のみを対象として取り上げる。座談会のやりとりを掲

載するにあたり、発言の意図や内容が変わらないよう注意を払いながら文章を整えた。

2. 対談の内容

【すべて目指さないといけない学校から、過ごすことが大切にされる学校へ】

[高松]

今年の秋に、全県のことばの教室の先生たちが集まる研究会で実践発表をしたんですけど、先行して行った地区研究会のプレ発表では、参加者から否定的な意見しか出ませんでした。これは、ことばの教室は構音障害や吃音、緘黙など、子どもたちの個々の違いを課題と捉えて指導、改善するところという大前提を崩したからだろうと思います。つまり、僕の実践は、個々の違いをユーモアに変えて安心できる環境をつくりながら、子どもたちの「生」を始動することで結果的に課題が改善に向かうというところを目指していました。そんなことで、覚悟して全県の発表に臨んだんですけど、いざ蓋を開けてみると、会場での質疑応答の時間も事後のアンケートも共感的な意見が多くて拍子抜けしました。

[林]

その否定的な意見を言う人たちと共感的な意見を言う人たちの観点で、何か違いはあるんですか？

[高松]

なんですかね？僕はこの世界に何の知識もなくポンと飛び込んで、自分の皮膚感覚を大切にして実践を重ねてきたんですけど、長年この世界で経験を積まれてきた先生からすると、自分のやってきたことが全部否定される感じがしたのかなと思います。一つ会場から「高松先生は希望してことばの教室の担当になったのですか？」という質問が出て引っかかったんですけど、もしかするとことばの教室の先生たちの中には希望しないまま担当になっている方もいらっしゃるのかなとか。あるいは、僕が希望して担当になったのであれば、あなたは向いていないから辞めなさいということなのかなとか。ただ、最初に発言してくださった方のポジティブな感想で会場全体の空気が共感する方向に流れたのか、「昭和の時代には、こういうことばの教室が色々なところにあったよね。」とか「従来の指導に限界を感じている中で、二、三十年後のことばの教室のありようを見た。」という意見も出ました。さらに、ご自分が担当され

ている児童との関係性を振り返りながら涙ぐんで発言された方もいらっしゃる、このまま終わっているのだろうかと思うほどでした。僕の発表の後に、国立特別支援教育総合研究所の牧野泰美先生のご講演があって「子どもたちにとって全て目指さないといけない場所になっている学校にあって、特に大人を信頼できない子どもたちの中には、課題の改善を目指すことよりも、彼らの土俵で付き合うことや、同じ目線、同じ気持ちで過ごすことを必要としている子どももいる。」とした上で、「一人ひとりの子どものニーズに応じて、目指すことと過ごすことのバランスを考えながら、実践できることも教師の専門性の一つである。」とお話しされていました。この「目指す」と「過ごす」というお話は、僕の個人的な関心事である「児童生徒と私を巡る問題」とすごく繋がると思いました。

【「児童生徒として〇〇ができる」の基礎にある、子どもの「私」の部分を満たす】

[高松]

今、社会では「多様性」とか「インクルーシブ」という言葉が盛んに使われているんですけど、僕個人としては教育に携わっているながらほとんど意識したことがなくて。むしろ学校現場で飛び交っている「インクルーシブ」という言葉には嫌悪感がありますね。

[五十嵐]

その嫌なイメージってどこからくるんですかね。

[高松]

学校現場において「インクルーシブ」という言葉は、支援級の子どもたちが通常級に赴いて一緒に学ぶという一方向の意味合いで使用されることが多いですね。だから先生たちの多くは、多数派が心地よく過ごせるようにつくられたこの世界に、少数派の子どもたちをなんとか適応させようと指導しています。それは、先生たちもこれまでの生き立ちで多数派に属してきた方が多いからです。やっぱりみんなと同じようにできないのは可愛そう、私自身は学校が楽しかったから学校に行きたくないなんて信じられないという思いが根底にあるんじゃないかな。そんな現場で「インクルーシブ」という言葉だけが一人歩きしている状況に僕は違和感を覚えるんだと思います。どうして何よりも先に少数派が有りのままの姿で心地よく過ごせる世界をつくらないんだろうとか、どうして少数派の世界に多数派の子どもた

ちが赴いて一緒に楽しむ時間がないんだろうとか。多数派でつくる学校社会の中でわざわざ違いを出してくれている子どもたちが多数派を基準にした指導によってどんどん平均化されていくので、実際は学校に多様性は存在しないし、多数派の子どもたちも人との違いというか「私」の部分を目立たせることができない。

[五十嵐]

露わにできないっていうのは、学校はもう目指すところが決まっているからですか。

[高松]

そうですね。先生としては、「児童生徒」として目指してほしいところがあるから「私」を目立たせたら困るわけです。ただ今は「児童生徒」以前に「私」の部分が揺らいでいる子どもたちが多く、目指せと言われても目指せないんですよね。僕は目の前の子をよく建築に例えるんですけど、「基礎」の部分にあたる「私」が満たされていない限り、「家屋」としての「児童生徒」は積み上げることができずに倒壊してしまうわけです。でも、学校現場では教室に入れない、みんなと同じところを目指せないという子に対して、個々の多様なニーズに応えようと別室を準備する。そこまではいいんですけど、結局、別室で「児童生徒」として目指そうとなることがすごく多い。だから、「私」の部分を目立たせたいと願う子は、いよいよ学校のどこにも居場所がなくなるわけです。

[林]

あの目標とかねらいに、何々ができると書くのをやめようって思いますよね。

[高松]

そうですね。(笑)

[林]

結局できることを目指してしまっ、存在することみたいな部分が抜け落ちているっていう批判は結構あります。私は特別支援学校に勤めていたことがあるんですけど、そこではかなり議論にはなっていました。ただあまり変わらないんですよね。保育では「何々ができるというのはやめよう」みたいな風潮はちょっとあるとは思いますが。さっきのインクルーシブへの嫌悪感っていう話について、私もちょっとわかります。多様性とかも最近ちょっと嫌になってきています。

[五十嵐]

前回この論文を書いたときに、多様性っていう言

葉をキーワードにはしていました。インクルーシブって言われる中には、例えば、障害がある子、発達障害がある子、性別違和がある子みたいな感じでカテゴリー分けした上で、そういう背景をもった人たちも一緒に生活したりとか、学習したりするようなことをインクルーシブと呼ぶような流れが一つある。ただ「そんなふうにかテゴリーをいくつも作って、そんなの多様性じゃないよね。多様性ってもっと違うものだよね。」っていうようなところからこの研究は始まっているんですよね。それなので、ちょっとインクルーシブへの挑戦みたいな感じを私たちももっていたりして。

【教師の多様性が認められない学校とそこで行われる多様性ごっこ】

[林]

私自身は外国ルーツの人たちを対象にした調査をしていて、外国人や色々な宗教の保育者がいてもいいよねって感覚をもっています。色々な保育者がいていいし、許される場でありたいと思っています。保育園とか幼稚園に行ってみると髪型とか色とか、割とそういうことがまだ小学校、中学校よりは許されつつあるかなっていう感覚はあります。ちょっと小学校、中学校は文化が違いますよね。そういうところも。高松先生の発表に対して「こんなことしたら困る」っていうふうに否定的な意見を飛ばしてきた先生たちって、そういうカテゴリーの中で生きているのかなっていう気もしています。

[茂木]

僕も井上先生も義務教育の学校にいたので、林先生のご指摘には思うところがありますよね。

[井上]

なかなか難しい問題ですね。

[高松]

「多様性」という言葉はたくさん飛び交っているけれど、実際の学校現場に多様な人間は存在しない。本来は多様なはずなんだけど、多様さを出す余白がないというか。僕が興味あるのは、構音障害や吃音のような表層の違いではなくて、「児童生徒」以前の「私」に潜む「異常性」です。別の言葉に置き換えると「癖」とか「人間味」「らしさ」になるのかな。学級担任時代は、他者と重ならないその子ならではの異常性になるべく出してほしいと願いながら一緒に過ごしていました。一人ひとりの子が大きなり小なりそうした異常性を出して、「らしさ」を分かち合っ

ていれば、吃音なんて気にならない。互いの「らしさ」がなかなか掴めない均質な空間で、たまたま表に出ているのが吃音だから揶揄いの対象になるわけです。例え、金髪の子がいても、あえて違いを出してくれているんだから学級づくりに活かさない手はないですよ。親子が納得した上で染髪しているんだったらそれでいいわけですけど、そんなことまで学校がルールで縛るわけです。健常者のように振舞う先生たちの中にも、おそらくその人ならではの異常性というか、こだわりや癖があると思うんですけど、やっぱりそういうものは出した方がいい。色々な先生がいて、色々な学級文化があつてこそ、子どもは六年間の小学校生活で文化の異なる六カ国を旅できるわけです。自分に合う文化もあれば合わない文化もあるけれど、六年生になった時に、結果的にこういう環境だと自分らしく生きていけるんじゃないかなとぼんやりと見えるといいなと。揺れる六年間でいいと思います。子ども自身が「そもそも一人ひとりが違うんだな。」と心の底から思えるような原体験が小学校の時に少なすぎる気がします。それが無いのに、「みんな違ってみんないい」と百万回音読させても全く意味がないですよ。「何も変わらないじゃん。みんな同じこと言っているし。」みたいな。だから、学校はみんなで自由教育のポーズをとっているだけのようになります。

[茂木]

今の学校は決められた枠の中で、みんなが多様性ごっこをやっている。

[高松]

そうです。ごっこです。

[林]

これは私自身に対する問いでもあるんだけど、学校の先生方が言う多様な人とか多様性っていうのは、何を指して言っているんだろう。多様性って言っている間は多様性にならないだろうっていうのはわかっているんですけど。

[茂木]

例えば、学校現場におけるインクルーシブの捉え方はすごくせまいと思っています。「障害がある子とない子が一緒に過ごすこと」くらいの理解の先生も多いんじゃないでしょうか。

[高松]

すごく限定的ですよ。

[茂木]

僕が研究している、多様な性のあり方とかはそこ

にはインクルージョンされていないと思っています。

【流行り言葉をテーマにした授業と子どもの実生活との乖離】

[林]

学校って割とSDGsとかダイバーシティとかそういうところを、子どもたちにテーマとして与えたりしますよね。そういう観点から。多様な人々とか違いとかっていうのに対して、子どもたちや先生方がどういうイメージをもって、どういう取り組みをしているのかちょっと知りたいです。

[茂木]

学校現場にいた僕の個人的な意見ですが、結局は流行り言葉のようだと思っています。上から色々な言葉がおりてきて、研修先でも、管理職からもその話をされる。こうやってそれが流行り言葉のように現場で一気に広まっていく。そして学校ではその広がりと共に何か実践が求められる。現場の先生方はそれらの言葉が大切なことなのはわかっている。けれども、それらについてきちんと学ぶ時間も機会もない。そんな状況でとにかく実践しなければいけなくなる。学校の取り組みとしては、キャンペーンみたいなのがやりやすい。生徒会活動等を利用しながらSDGsだから「ゴミ削減キャンペーン週間」みたいなものを企画して、それをクラスで競争するみたいな風にイベント的にしたりして。こうやって何か特別なパッケージを生徒に与えて「はいやったよ。大事だよ。」みたいにもっていく。これはあくまでも僕の経験をもとにした話ですけど。

[高松]

僕ら教員の授業づくりや学校行事も全部同じですね。国語、算数、理科、社会、図工も運動会も学習発表会も。子どもの思いよりも先に大きな命題があってやるみたいな。

[林]

そうなると授業でやっていることっていうのが授業外に反映していかないっていうか、実際の生活の中になかなか広がっていかないのではないですか。

[高松]

広がらないですよね。例えば「川や海の生き物を大切にしよう」というような命題がありますけど、そんなことを突然先生から投げかけて授業をしたところで、大切にしようなんて思わないですよね。それよりも、幼少期から地元の川や海に全身で関わって遊び倒すことで、「俺にとってこの川はすごい大切

なんだ」という愛着がもてる。そういう原体験もないまま、「地元の川だから大切にしよう」と投げかけても活動の質は先細りにしかならないですね。だからそれも結局ポーズなのかなと。それでも子どもは先生に寄り添って美しい言葉を並べたり、資料や新聞なりを立派に整えたりする。それで先生はいい実践ができた満足していることも多いと思います。そういえば、かつて学級担任をしていた時に、給食中、わざわざ持参したビールの空き缶に牛乳を入れて飲む金髪君がいたんです。彼はものすごく「良い子」というよりも「いいヤツ」なんですね。このクラスには一人肢体不自由の子がいたんですけど、一時期はほとんど自力で動くことができなくて、学校を休みがちだったんです。そんな中、金髪君が「そういえばアイツ全然学校来てねえし、遠足も行ってねえな。アイツを遠足連れてってやりてえな。クラスで遠足やろうぜ。」と言い出しまして。僕のクラスは毎週金曜日を一日総合デイにしていたんですけど、金髪君は仲間を巻き込んで、クラス遠足を実現するためのプロジェクトを立ち上げました。初回の活動は「アイツん家でゲームしてくるわ。」と言って、休んでいるその子の家に行き行ってひたすらゲームしただけ。その後も総合の時間は毎週通って、晴れている日はゲームの合間に彼を外に連れ出して車椅子で散歩したりして。それから金髪君は相手によって態度を変えない性格なので、車椅子で身体が動かない彼を全然特別扱いしないんですね。トイレで介助している時も「オメェ、早く出せよ！」って言ったり、その子に変な話をすると頭を叩いたり。そんな金髪君と仲間がいよいよクラス遠足に本腰を入れようと、週休日に自分たちだけで電車とフェリーを利用して無人島に下見に出かけたんです。そして、校長先生へのプレゼンを経てクラス遠足を実現して、車椅子の子を懸命に介助しながら島を踏破したんです。そんな彼らは「インクルーシブ」とか「多様性」なんて言葉は使わないし知りもしない。ただ、授業時間を使って休んでいる子の自宅に通って、ゲームや散歩をしているうちに遠足に連れて行ってやりたいという気持ちがより強くなった。授業中に友だちのお家でゲームをしているだけなんていうのはアウトかもしれないけれど、実はその過程で強い仲間意識を育んでいたんですよね。指導案に乗っからないような、そういう人間的な時間をもっともっと学校教育の中でフォーカスする必要があると感じています。そして、そんな彼らが後にSDGsや多様性という言

葉を知った時、「俺らが普通にやってることじゃん。今更、何言ってんだよ。」みたいな感覚になるといいなと思います。そういう経験もないまま、大人がつくった言葉をそのまま子どもたちに下ろして言葉遊びをしているのが今の学校なのかな。勤務校の六年生の総合は毎年、近隣の特別支援学校と交流することがルーティン化しているんですけど、個人的には金髪君のプロジェクトの方がワクワクします。ただそういう実践は、全く評価されないですけどね。(笑)

【教師の原体験不足と学校化された身体の問題】

[井上]

自分で主体的に色々考えて行動できて、ただそれがちょっと学校の枠から外れたような子が出てきたときに「よしよし」って思うような先生も中には、いると思うんですよね。でも学校の先生って忙しいじゃないですか。色々なカリキュラムがあって、上からあれもやれこれもやれって色々なことがおりてきて。そんな中で、そういった子どもたちを認めてあげる心の余裕がない。そんな現状もあると思います。実際に、その場にいるとどうにもならないような状況とかが、やっぱり色々あるんだろうなあって思います。その結果、子どもたちに片身のせまい思いをさせたり、多様性が認められなかったり、インクルーシブになってないような現状ができてしまっているんじゃないかって思うんです。

[高松]

仮に忙しくなかったとして。そういう子が出てきたときに、果たして面白がれるかというと、実際はどうなんだろう。先生たちが「べき」「ねば」という教員の「型」を外すことって結構大変じゃないかな。型から外れた子をどう面白がって、どう分かち合えばいいのかわからない先生もいると思います。

[林]

高松先生は「面白がれる大人」になった瞬間の大人を見たことってありますか。

[高松]

あります。

[林]

何がきっかけで大人が変わるんでしょうか？

[高松]

やっぱりそういう大人は、他人の中にある自分との違いを面白いと感じた原体験があるんだと思います。それが何かの拍子に、例えば、僕が通級児童の理解不能な言動にツッコミを入れて、なんでそんな

ん！？と面白がっている現場に居合わせたり、ツッコミの事例をまとめた記事を読んだりした時に、「教員」以前の「私」の部分がパッと開くという感じです。原体験の中に「そうだよなと思えるような体験」をもっている人は教員の「型」が外れる。ただどこまで遡ってもその原体験がなくて、手繰り寄せるものがないような場合は、なかなか難しい。だから結局、金髪君のことも職員会議では大問題になって、なんとかやめさせたいとなる。そして、校則で金髪君を縛る方向に進んで、職員会議中に僕一人だけが反対を表明する状況が生まれる。けれど結局多数決でその方向に決まってしまうわけです。議論する過程では、何度となく「染髪していると上級生に絡まれたり、犯罪に巻き込まれたりする。」というような発言があるわけですけど、何の根拠もないわけです。この発言の背景には、恐らく髪を染めることに対する偏見をもった原体験があると思うんですよね。髪を染める人は不良みたいな。ただ、そんなことは絶対口にできないから、もっともらしいことを言葉にしてしまう。

[井上]

「派手な髪型や服装をしていると犯罪に巻き込まれるよ」っていうようなことって、確かに学校でよく言われますね。

[茂木]

学校あるある。

[高松]

違いをもっと認めていこうよと言っても、結局最後はいつもそういう偏見が見え隠れしてしまう。僕も含めてですけど、先生たちの多くは自分が優等生で過ごしてきているので、その枠から外れているものに対しては、大なり小なり偏見があるんだと思います。

[井上]

実際にその金髪くんは、何か先生方を困らせるようなことをしてたりとかっていうのはあったんですか？

[高松]

いやいやとんでもない。態度がデカいとか、口のきき方を知らないということはあったかもしれないですけど。とても人懐っこくて優しい子です。当時の学校の判断には、お母さんはとにかく怒っていましたね。「親である私がいいって言っているんだからいいだろう。」みたいに。その後も金髪君は金髪のままでしたし、上級生に絡まれることもありませんでした。

した。

[茂木]

金髪を受け入れられない先生たちからすれば、その態度がもう問題になっている。

[高松]

そうそう。

[茂木]

そしてそれを子どもたちは敏感にキャッチしている。

[井上]

ああ。なるほど。

[茂木]

そうすれば子どもの中に「この人たちは自分のこと認めてくれていないんだな」という気持ちが生まれるのは当然ですね。そしてそれがどんどん積み重なっていく。先生と子どもがうまくいかなくなるのは当然ですね。子どもはそんな先生のことは信じないし、不満も湧いてくるわけだ。

[高松]

そこですね。

[茂木]

そうやって教員たちの決めた学校文化の中で認められて心地よく生きてきた人たちが、先生になっているんでしょうね。「これが学校なんだよ。これが正しいんだよって。」という価値観で、身体を中心から末端まで全部染まっている。全員がそうだとは言いませんが、そういう先生がたくさんいるんだと思います。

[高松]

そうです。だから「私は小学校時代が楽しかったから、子どもたちにも同じ思いをさせてあげたい。」となる。要は、学校は従来の学校教育の恩恵を受けてきた人たちの多数決によって運営されているわけです。だから学校はなかなか変わらない。かつて勤務していた附属小学校でも同じようなことを感じていましたね。9年間でたくさんの教育実習生と関わらせてもらったんですけど、豊かな経験をしたり、物事を斜めから見たり、他人とは異なる視点をもっていたりする学生の多くは、教育実習で早々に見切りをつけて、教員採用試験を受けないんですね。教員養成学部の先生たちは、そういう学生をそそのかして、学校現場に送り込むことに力を注いでほしいです。学校の当たり前に違和感を覚える人たちが増えない限り、学校が変わることはない気がします。今の学校は、政治でいえば一党独裁。その中で政治

に関心のない若者、つまり学校に行きたくない子どもたちがどんどん増えているように見えます。

[林]

先生たちが「自分たちがこういうふうにしてよかったから、それをまた体験させたい」という部分ももちろんあると思うんですけど。むしろ教員の側が子どもの頃にできなかったことを、子どもたちにやらせるのが悔しいというか「あの時の自分もこれに耐えてきたんだから、あなた達も耐えなさい」みたいな感覚があるんじゃないかなとも思うのですが。

[高松]

それもあると思いますね。

【個性を発揮できない教師と均一化される学校】

[林]

私、勤務先が変わって大学の教職担当になったんです。真面目な学生もすごく多いんですが、今、採用試験に受かっている先生方って、以前と違うタイプの学生が受かり始めてるんじゃないかなって思っているんです。特に小学校は倍率がすごく下がっていたりもするので。そのことを、勤務先の教職関連の先生方が「結構やばい」とか「今の学生たちはやっていけないんじゃない」とかって心配しているんです。私はそういう考えとは少しちがっていて、今まで先生にならなかった層の人たちが入っていくことによって、何かが変わるんじゃないかなって、今の状況にちょっと期待をしていたりもするんです。

[高松]

確かにそれはあるかもしれないですね。

[林]

これからは、これまでの優等生とは違った人たちが先生になっていくっていう感じがしています。

[茂木]

僕が見てきた職員室っていう空間には「学校教員の文化に合わない人はダメな先生」というラベルを貼る文化みたいなのがあって、一度それを貼られてしまうと、何をやっても認めてもらえなかったり、ひどければ排除されたりするような文化があると思っています。みんな仲良くとか子どもたちには言っているけれど、先生たちの中には「あの先生。もうダメだよね。」みたいなレッテル貼りをする感じがある。

[高松]

確かにありますね。

[茂木]

例えば「金髪を許しているなんて、高松先生って生徒指導がちゃんとできない、いい加減な先生だよね。」みたいな感じ。

[高松]

僕はその最たるもんですよ。

[茂木]

あの空間が、そもそも全然多様性を認めていないじゃないかと思います。

[高松]

そうですね。例えば、足並みを揃えないで子どもたちと学級独自の文化をつくっている先生を批判する先生がいるんですけど、批判の言葉の裏には「自分がこれだけやりたいくないことをやっている中で、あの人だけズルい。」という思いが透けて見える時があります。批判する時間があれば、まず自分がやりたいことをやればいいし、そうすればやりたいことをしている人を面白がれると思うわけです。

[茂木]

林先生がおっしゃったように、色々な人たちが先生として学校の中に入ることができるようになったとしても、実はその排他的な中で「こんな目に合うんだったらもういいや。辞めよう。」ってなるんじゃないかっていう危機感をもっています。中には「これ変ですよ」とか「もっとこういうやり方がいいんじゃないですか？」っていう声をあげていける先生たちも一定数はいると思います。ただそういう先生たちが、あの学校文化の中で生きていくのは結構大変だと思っています。それだったら気づかないふりをして、牙を隠して、型にはまった先生を演じて、自分らしさを出さずに、思うところはあってもぐっところえていく方が生きやすいはずですよ。

[高松]

そう感じますよね。初任の先生は、ベテランの先生と一緒に学年を組むことが多いんです。また初任者の指導担当として、退職校長が務めることの多い指導教諭もつきます。ベテランの先生からも、指導教諭からも日常的に指導されてばかりなんですよね。「私」を開く余白が全くない。本人としては、ここまで「私」を開くことができない、つまり自分を生かすことができない環境の中で、あと四十年も働かないといけないと考えただけで気が遠くなってしまふ。初任者で療休に入ったり、退職したりする先生たちの中には、こうした思いをおもちの方もいるんじゃないかな。やっぱりどんな人の中にも特異性っていうか、面白味や人間味、強みがあると思うから。

それを自分自身で掴んでいて、そこから教育活動をつくり、広げることができれば、多忙感がなくなってもっと教員という仕事を楽しめるんじゃないかなと思います。

[茂木]

これも個人の感覚ですけど「それぞれの先生の裁量や持ち味で好きにやっていいじゃん！」っていう幅がせまくなっているように感じます。

[高松]

本当そうですね。

[茂木]

「この授業はこうやるといいんだよ。」っていうマニュアルみたいのがどんどんできている。「経験の浅い先生もこの通りにやっていけばそれなりの授業ができますよ。」みたいな。

[高松]

そう。だから学年で時間割を揃えたり、国語でも今日は教科書の何ページ目から授業するということを予め決めたりする。

[井上]

はいはいはい。

[高松]

クラス便りなんかは自分の教育観を親に伝える絶好の場だと思うんですけど。一人の先生が出すとみんな出さないといけないからという理由で一律なしにしたり。

[林]

クレーム対応のためにそうしているっていう感じですか。

[高松]

そうですね。結局親の中にも様々な価値観があって、学校現場は実際にクレーム対応に疲弊しているところもありますから、一枚岩になろうと。「学校としてこうです。」「学年としてこうです。」と言わないと保護者に太刀打ちできないから、その対策でやっているところはあると思います。だから結局学校の先生も「私」を開かず、学校の教員としてますます強固な姿勢を見せる。そうすると当然保護者も「私」の部分を開かないで、保護者としてどんどん強固になっていく。結果としてそこには問題が起きなくても、コミュニケーションを阻害する大きな壁ができてしまう。僕も極端な学級づくりをしていましたけど、クラス便りでも面談でも「私」を開いて保護者と関わることを意識していました。「この人も私と同じ人間だ」ってわかれば保護者も安心だし、実際に

何でも話せる関係になることが多かったです。そう考えると今の学校の対応は、逆効果だと思うところはすごく多いですね。

[茂木]

このままだったら極端な話「先生なんて誰でもいい。誰がやっても一緒だもん」ってなっちゃう。あの先生じゃなきゃダメなんだ。この先生だからいいんだ。っていうのがなくなっちゃう。資格をもっている真っ白い人がいてくれればいい。そうすればいつでも代替可能です。みたいな感じ。

[高松]

確かにどんどん無機質になっていますね。先生たちの個性や考え方が見事にバラバラで、どの先生が正しいかわからないというような環境ではないです。かつて昭和の学校現場を経験してきたベテランの先生たちと学年を組んでいた時は「まあ、高松さんだからね。」と面白がってくれる人が多かったんですよ。でも、若い人たちがどんどん増える中で僕がどんどん得体の知れない生き物として扱われることが多くなったなあと感じています。(笑)

【不安感を共有し笑いで乗り越えることとそれを阻害する不寛容な空気】

[林]

高松さんのところに訪問したときに、不安感って笑いでこう乗り越えていくんだなっていうのを感じて。特別支援学校に勤めていたときに、笑い、ウィットのある返しとか、子どもが変なことやっちゃった時に、ちょっと笑って「こういうのも面白いよね」っていう風に言って面白がって、それを超えるみたいなパターンって結構あって。大変なこととかがあっても、乗り越えられてきたなっていうふうに思っただけです。ただそこには子どもが入ってない。子どもについては障害があるからっていうのもあったんだろうけど、今振り返ってみれば笑いの中に子どもが一緒にいなくて、大人だけがその大変なことを乗り越えていた。だけど先生のところに行ったら、みんなが面白がれるっていうか。そこにその不安感とかを共有しながら、その不安を「面白いね」っていう視点から見れば「面白いんだよ。」っていうのを、みんなで共有しながら超えていく。子どももこうやって共有できるんだって思って。最後に墨で、教頭先生と副校長先生が「人権を取り戻す」って書いていた。あと「狂犬」って書いてあったりとか。それを見た時に「みんな不安がってんじゃない」って。不

安がっているからここで、なんかそれを面白さに変えるっていう作業をしていて。多分それがセーフティーベースみたいなものになって帰っていくんだなって、そんなふうになっているじゃないかって思ったんですよ。だからこそ実際そういうふうになっているのに、なんでみんな不安を閉じ込めて、無機質なものにして無理矢理乗り越えようとするのかっていうのが不思議なんです。

[高松]

確かに。

[林]

なんか笑って楽しく超えてきた経験っていうのが、むしろいけないものってされてきたのかなって。ちょっと思ったんです。

[高松]

崇高な公教育においては不謹慎。(笑)

[茂木]

バカにしているみたいなね。「面白がる」とか「面白い」とかをそういうふうに捉えちゃう人もいるのかもしれないです。

[林]

だから、多分高松先生に否定的な意見を飛ばしてくる先生とかも、どこかで「不謹慎」とかって思っちゃってるのかなって。多分それまでに、笑いながら、面白がりながら、楽しく乗り越えてきた経験があれば、楽しく超えられる方がみんなにとって良いんだっていうのがわかると思うんだけど。

[茂木]

何か失敗したときに「あ。やっちゃった」とか「迷惑かけたな」とか「どうしよう。怒られるかな」とかって誰にでもありますよね。でもその時に、周りの人が笑って許してくれたら救われますよね。「ああ、よかった」って。それだけで、実はすごくほっとして、受け入れられている感じもする。だからこそ、次は同じことしないようにしようって素直に思える。失敗を切り替えられるし、それを引きずらないでいられる。だからといって決して反省していないわけじゃない。ドキドキしているときに相手が笑ってくれたら、大人だってすごくほっとする。

[高松]

そうなんですよ。今の学校現場に最も必要なのは寛容さです。子どもに対してもそうですけど、教員同士も本当に不寛容で、とにかく互いの違いを面白がれない。それから管理志向もすごく強まっています。管理すればしようと思うほど、違和感は敵に

なっていく。先生の考えに対して「え？僕はそう思わない。」と違和感を覚えた子どもは、管理したい先生からすれば敵じゃないですか。だから違和感はあるべくもたせないし、出させない。出たとしてもすぐにその芽を摘みたい。違和感の中にこそ、その子らしさはあると思うんですけど。違和感ってなかなか学校教育で主題にならないですよ。

[茂木]

違和感で思い出したんですが、この前授業の中で粘土に触れてもらいました。その時『好きなものを作ろう』はよくあるから『嫌いなものを作ろう』って言ったんです。学生たちは「え。嫌いなもの？」みたいなリアクションになるわけです。このリアクションが生まれた背景にあるのって、嫌いとか苦手とかネガティブな方じゃなくて、何でも好きなもの、良いもの、得意なものみたいな、ポジティブなことばかり考えさせられてきた管理教育の効果だと感じています。

[高松]

ポジティブね。「楽しかった運動会」というテーマで作文を書こうみたいな。運動会が早く終わってほしいと願っている子も絶対にいますからね。

[茂木]

そうそう、無理やり楽しいところを書かなきゃいけない。見つけなきゃいけないみたいな。

[高松]

だから作文嫌いが多いんですよ。昔、「大嫌いな作文」というテーマで作文を書く授業をしたんですけど、日頃は手が止まっている子がものすごい勢いで書き殴っていました。人間は生きている限りポジティブなことばかりではないですよ。学校はネガティブな部分をフォーカスする授業がなかなかない。いつも清く正しく美しく。だからネガティブなものは人と人との関係を分断するものという前提で指導する。でも、ネガティブでも共有の仕方によっては人と人をつなぐものだということを、体験を通して学ぶ必要があると思うんですよ。実はみんなもそういう部分をもっていたんだという実感が子どもたちの安心に繋がることもありますよね。教員も同じなんですけど、それがなかなか分かち合える機会がないんですよ。

[五十嵐]

その話って保育にも関わっていて、保育所保育指針とか、幼稚園教育要領っていう、学校で言うところの学習指導要領みたいなものがあるんですけど。

その中に幼児期に育てたい十の姿とかいうのがあるんですよ。

[高松]

それはすごい。

[五十嵐]

その十の姿を見てみると、何かこう問題にぶち当たったときに、諦めずにみんなで考えて解決することみたいなことが書いてあってあったりして。ずらずらとその十の姿が書かれているんです。でも私からしてみたら「そんなの大人でもできないじゃん。諦めないって言うけど、諦めるし。」みたいな。そういうことを心の中で思っていて。今は保育も「目指すべき姿みたいところを達成させていこう」というような流れになっていて。学生もその文言をすごくよく信じるわけですよ。だから私たち教員も、そう信じ込ませていたりして。

[林]

騙してる。騙してる。(笑)

[五十嵐]

ただ私の授業はちょっと違っていて。「よく読んでみて。これおかしくない？」って聞くことにしているんです。そうすると「考えてみれば。おかしいかも。」「私たちの人生、結構諦めてきたことの連続だったよね。」みたいなことを話し出すんですよ。「そうだよ。諦めないでっていうことがポジティブに語られているけど。諦めることの方が実は多くて。そことどう対峙するのかなとかっていうのを考えることが大事なんだよ。」なんていう話をするんですよ。保育者養成の場合にはこういう問いかけをすると、教員も開きながら学生も一緒に開けていく可能性は出てくるんじゃないかなっていう気がしているんです。「こういう姿を作りましょう」というのは、保育の世界にも段々入り込んできているっていうのは感じているところです。

【失敗体験が生むものと一人一人のもつ異常性＝ユニークさの魅力】

[林]

最近思ったのは、なんか割とみんなポジティブなことに対して自己肯定感があるっていうふうに言うんだけどそれって実は違っていて。失敗した自分も認めたりとか、できない自分を認めたりするっていうことが自己肯定なんだっていう風に思ったりしています。良いことができることとかが自己肯定感が高いみたいに言われているんだけどそうじゃない。

ダメな自分を肯定するとかイケてない自分を肯定するっていう方が実は結構大事。そんな自分でも面白がれるとか。そんな自分でも大丈夫とかっていう感覚をもつには、やっぱりそれを楽しめるとか、それを笑って共有できるとかっていう体験がすごく必要なんじゃないかなって思ったりします。だからやっぱり面白がるってすごく重要なんじゃないかなって。高松先生の学校に行った後からずっと考えています。[井上]

学校だと「子どもに成功体験を」とかってことを本当によく言いますもんね。それだけじゃなくてこれからは「失敗体験を面白がる」みたいな。失敗やネガティブな部分をまず受け入れて、さらにそれを超えていくみたいなことが大切だと思います。

[林]

変なこととか失敗したこととか、失敗の産物みたいなものを見て「なんだこれ！？面白い！」っていう風に。

[高松]

大谷翔平選手の異常性とか変な癖とか知りたいですもんね。授業でテレビの中の大谷選手を扱ったところで、すごい人だと頭では理解できるけれど、存在も成し遂げた偉業も自分自身と乖離しすぎて目指しようがない。だったら大谷選手が鼻をほじっている写真とか見せた方がよっぽど距離が近くなる。(笑) テレビや海の向こうでなくても、僕らの身のまわりにはいくらでもオモロい人がいますよね。あのロッケ屋のおっちゃん、なんかいつも幸せそうだなあとか。子どもたちとはそのレベルで社会に目を向けていきたいと常々思っています。

[五十嵐]

なんか今の話って高松先生がさっき話していた「私を開く」とっていうところと通じてるところですよ？

[高松]

そうですね。

[五十嵐]

一人一人のユニークさと言えぱいいのかな？

[高松]

最近、そういうものが障害をもつ人の特権のように語られることが多くて、それもどうなのかなと思うところがあります。

[五十嵐]

そう。

[高松]

健常者のように振舞っているけれど、実はみんな健常者ではない。どんな人でも社会生活を送る上で、どこかしら生きづらさというか障害になるものをもっていますよね。

[五十嵐]

あります。

[茂木]

3月に高松先生の学校を見てから思っているのは、図工とか美術の時間に、お互いの作品を鑑賞し合ったりするんです。その時に「良いところを褒める」みたいなのが前提に強くある。

[井上]

はいはいはいはい。

[茂木]

ただ中には「絶対私はそんなのは作らない」という子がいていいはずなんですよね。そうじゃなかったら、みんな同じようなものを作っちゃうじゃないですか。本当は「私は絶対作らないな」とって思っているんだけど、「(先生が良いところを探せって言から・・・) まあ強いていえばここが良いところかな？」っていう感じで無理やり見つけて、無難なことを発表したり書いたりしているじゃないかなって思っているんです。

[高松]

そうですね。

[茂木]

本当は「私は絶対あなたみたいな作品は作らない。でもそんなの作っちゃうあなたのことは好きよ。」みたいな感じが大切になって。「作品のことは全然理解はできないけれど、そんなの作れちゃうからこそ、あなたのこと面白いと思うよ。」とか「なんでそんなの作っちゃうの？」みたいな。

[高松]

まさに「なんでそなんん！？」⁵⁾ですよ。

[茂木]

そうです。

[高松]

美術鑑賞も「なんでそなんん！？」的視点で作者にツッコミを入れていく。自分が気になったり、心地よく感じたりする作品から言葉をひろうことが主流ですけど、全く理解できないけど、あえてネーミングするならこんな感じかな？みたいなツッコミを入れる練習をしていくといいかもしれませんね。

[茂木]

自分と全然違う人だから、そもそもわけわかん

くて当然で、だからこそ一緒にいて面白いんだと思うんです。「どうしてこんなこと思いつくの！？この人は何者！？」っていう感じで興味をもって、関わっていくうちに噛めば噛むほど味が出るスルメみたいに「またこの人こんなことやっちゃうんだ」みたいな感じで旨味が出てくるんじゃないかなって思うんです。

[高松]

そういうことで言うと、行きたいところに行くとか、やりたいことをやるだけでなく、今日は特に行く気もないところに行ってみようとか。やりたくないことをやってみようとか。全く期待していなかったけれど、行ってみたら案外面白かったとか、いざやってみたらハマったという逆の時間も必要ですね。

【子どもたちの欲望を育てる】

[五十嵐]

私、高松先生のあその空間に行ったときにいつも思うのは、高松先生って子どもたちの欲望を育ててくたなあって思っています。

[林]

ああ。

[五十嵐]

私は、なんかこうしたいとか、ああしたいとか、欲望みたいなものをすごくもちにくい世界になって思っています。例えば何かこう働きかけるにしてもこれとこれどっちがいいみたいな選択肢はたくさんあって、そこから正しいものを選び取るっていう。それを私たちは主体性って呼んでないかって思っているんです。最初からもう決まっているわけですよ。でも高松先生は、そういうのがないところから、ご自身の「これやってみようかな？」みたいなことを育てていくっていうことをされているんだなってずっと思っています。それがなんかこう、その子のその思いに準じていって、ツッコミを入れたりしていくと出来上がっていくんだなっていうふうにも思っています。

[高松]

いいですね。欲望って。これも学校教育では主題になることはない。欲望をもつ子を育てる。

[茂木]

そんなの主題にしたら、管理職とかから「これは欲望じゃなくて違う言い方がいいんじゃないかな？」みたいに言われる。

[五十嵐]

言われちゃいます。でもなんか。それしかね、言葉が浮かばなかったんですよ。

[高松]

すごく面白いなあ。欲望。

【目指す子ども像をおしつける学校の大きなおせっかい】

[茂木]

高松先生の中には「この子がこういうふうになったらいいな」とか「こういうふうになるといいな」とかっていうビジョンみたいなものはあるんですか？

[高松]

学校現場では教員が何をするにも目指す子ども像を問われることが多いですよ。子どもたちに将来こんな人間になってほしいと。でもこれって、一部の子どもたちからすればお節介らしいんですよ。かつて学校への不平不満をユーモアに変えるために通級していたひれカツ姉ちゃん（ことばの教室での愛称）がいたんですけど、「目指す子ども像」について話題にした時、「ウザッ！なんで自分の将来を他人に決められないといけないんだよ！」と斬られて、確かにそうだなあと思ったんですね。

[茂木]

評価の中にも、授業中にこういう子どもの姿が見られたら Aですよ。この姿だったら Bですよ。とかがあるんです。それを具体的な子どもの姿で書いたルーブリックとか。結局これって、先生が決めた子ども像に寄せていくってことですよ。そしてそこに書かれていない子どもたちの姿は評価されないわけです。どんなに主体的に、それこそ好きなことをバーってやったとしても、その姿からずれていればそれは認めてもらえない。

[高松]

どんな人間になりたいかなんて、そもそも本人が決めることですよ。だから僕はその子の未来のことは極力考えないようにして、今その時を楽しむようにしています。そういえば、昨日職員室に子どもが二、三人入ってきたので、冗談で「ダメだよ。今、成績処理期間中だから入れないよ。」と言ったら、彼らは「ここに成績とかあんの？」とキョトンとして。

「この教室で取り組んできたことを全て成績に出すんだ。」と言っても、「いらなくね？」とか言われる。彼らには、この教室で過ごしている時間の評価は必

要ないんですよね。多分、自分がやりたくてやっていることや満足していることに対して、他人に評価されたくない。それがあるんだと思います。

3. 対談から立ち上がってきたこと

ここで改めて5名で行った座談会の会話記録から見出されたキーワードを並べてみたい。

- ・すべて目指さないといけない学校から、過ごすことが大切にされる学校へ
- ・「児童生徒として〇〇ができる」の基礎にある、子どもの「私」の部分を満たす
- ・教師の多様性が認められない学校とそこで行われる多様性ごっこ
- ・流行り言葉をテーマにした授業と子どもの実生活との乖離
- ・教師の原体験不足と学校化された身体の問題
- ・個性を発揮できない教師と均一化される学校
- ・不安感を共有し笑いで乗り越えることとそれを阻害する不寛容な空気
- ・失敗体験が生むものと一人一人のもつ異常性＝ユニークさの魅力
- ・子どもたちの欲望を育てる
- ・目指す子ども像をおしつける学校の大きなおせっかい

キーワードの中には、一見すると過激だなと感じるものもあるかもしれない。しかし、それぞれのキーワードを浮かび上がらせた対話の内容をみれば、それが5名それぞれの経験に基づいたものであり、決して奇をてらった大げさなものではないことがわかるはずである。

ここにあげたキーワードを眺めていると、そこから「一人一人の根源的な存在を認める」というより上位のキーワードが見えてくる。例えば高松が話していた「児童生徒として」以前の子どもの「『私』の部分」とは、つまり一人の人間としてその存在を大切にすることである。しかし現在の学校教育は、その根源的な部分を満たす前に「児童生徒」という画一的なあり方を押し付け、子どもたちのもつ「欲望」や「異常性＝ユニークさ」という「らしさ」を抑える方向に働いている可能性が高い。

また学校教育のなかで一人の人間として、その人らしくいられないのは子どもだけではないことも見えてきた。先生たちも、一人の人間としてではなく

「先生として」「教師として」を求められている。そうやって多様性を失った教師集団が、子どもたちの多様性を認めないことで、多様性を認めることのできない人間を育て、またその人が教師になるという負のスパイラルを生み出してきたのではないだろうか。

このスパイラルを断ち切る可能性をもつ方法として有効なのが、全ての人のもつ「異常性」を抑え込むのではなく、お互いに面白がることだと考える。これまでの私達は自分たちの異常性をなんとか誤魔化し、隠しながら、まるで同質な存在であるかのように振る舞ってきた。その中で、隠しきれない、あるいは隠そうとしない異常性を目の当たりにした際、多数派の意見や常識という大義のもとにそれを矯正しようとしたり、その発露を止めようとしたりしてきた。そしてそれも叶わない場合は、自分の近くからその存在を排除することでやり過ごそうとしてきたのではないだろうか。しかしこの方法では、多様な私達は決して繋がることはできないだろう。我々は早くこのことに気づく必要がある。

本座談会にも出てきた「なんでそんなんプロジェクト」は、そのウェブページにおいて「人の行為から生まれる『よくわからないこと』に対して真摯に向き合い楽しむための方法を探るプロジェクト」として「『よくわからないもの』を断絶し排除するのではなく『無理にわかり合おうとするのでもなく』想像力を駆使して『分からなさを楽しむこと』」を実現する方法として「自分の語彙では捉えることができない、未分類の出来事。そういったものに『なんでやねん』とツッコミを入れて面白く捉え直す。」ことを提案している⁶⁾。また、同時代を生きる誰もが関わり支え合える社会を目指し「ゴミコロリ」⁷⁾などのユニークな活動を展開している株式会社 NPO スウィングのホームページにも「いいことばかりじゃない 生きることは楽じゃない だからこそ 楽しむ風通しを悪くして 頭でっかちになって 勘違いしないように 開く すべては変わりつづけるものとどまって腐ってしまわないように 前へ後ろへ揺れる ギリギリアウトをセーフに どうしようもない弱さを強さに たまらん生きづらさをユーモアに」⁸⁾という記述が見られる。このように既に多様な我々が共に生きる方法として、「異常性＝ユニークさ」を「面白がる」ことに可能性を見出した取り組みが実践され、その成果が着実に蓄積され初めているのである。ここで紹介した2つの団体は障害者の支援

を行っている。しかしそのどちらも障害者のためだけでなく、全ての人が生きやすい社会の実現に向けて取り組んでいる点に改めて注意したい。座談会の中で高松が「最近、そういうもの(ユニークさ)が障害をもつ人の特権のように語られることが多くて、それともうなのかなと思うところがあります。」「健常者のように振舞っているけれど、実はみんな健常者ではない。どんな人でも社会生活を送る上で、どこかしら生きづらさというか障害になるものはもっていますよね。」と話しているように、異常性を特定の人のものにせず、全ての人の魅力として面白がっていくことが重要なのである。

高松が勤務することばの教室とそこで過ごす子どもたちの姿から「面白い」「面白がる」がもつ可能性をまざまざと見せつけられたことをきっかけに、「(その人の感性や表現を)『面白い』と感ずることで、人と人は繋がれるかもしれない」という仮説について改めて対談を通して考えてきた。その結果「面白い」「面白がる」を支えるより根源的な姿勢のようなものが見えてきたと感ずている。

人のことを面白がるなんて不謹慎だと感ずる人もいるかもしれない。しかし誰にでも失敗をしたことがあり、できないことや苦手なことがあり、自分の至らなさやダメな部分に悲観した経験があるだろう。そしてそれを笑って受け止めてくれた人に救われた経験もあるのではないだろうか。もちろん文脈やその面白がり方によっては、不謹慎になる可能性がないとはいえない。だからこそ私達は「面白がる」ための姿勢や、そのスキルを身につける必要があるのだ⁹⁾。

今回の座談会で話題の中心となった義務教育が抱える課題については、世の中が学校化されているといわれる現代において、保育者養成の現場にも通じるものといえるだろう。保育現場から高等教育まで、多様性を取り巻く課題は山積みであるがそれに悲観することなく、それを面白がりながらこれからも実践、研究に取り組んでいきたい。また最後に本座談会が、終始笑いに溢れていたことを申し添えておきたい。

引用・参考文献

1) 林恵・茂木克浩・五十嵐元子「教員の対話から考える保育者養成と多様性―【座談会】人との関係をどう構築

するか―」『足利短期大学研究紀要』第 44 巻 第 1 号, 2024, pp. 59-65

2) 同上, p. 65

3) 同上, p. 65

4) 高松の実践については、先生の学校 web 『なんでそんなん！？』は、子どもへのまなごしを拡張する魔法のことば。『違い』をユーモアに変える、通級指導教室」[<https://www.sensei-no-gakkou.com/article/no0095/>](2025/01/21 最終アクセス)や同 YouTube チャンネル[https://youtu.be/B7pbFt8VJ_A?si=nq7RLLeDJCD_q3O75]、「カマクラ図工室」[<https://kamazuu.work>]等を参照のこと。

5) 生活介護事業所ぬかつくろとが主催するプロジェクト「人の行為から生まれる『よくわからないこと』に対して真摯に向き合いたのしむための方法を探るプロジェクト(web ページより抜粋)」「他者から見たら『なんでそんなことしてるの?』『なんでやねん!』と言われてしまいそうなこと(web ページより抜粋)」を WEB サイトで募集している。[<http://nandesonnan.com/>](2025/01/21 最終アクセス)。高松の取り組みはこのプロジェクトから影響を受けている。

6) 同上

7) 株式会社 NPO スウィングが 2008 年から行っている活動。全員が『まち美化戦隊ゴミコロレンジャー』として全員がブルーのスーツに身を包み、月に 1 度ゴミ退治(ゴミ拾い)を行っている。[<http://www.swing-npo.com/activities/index.html>] (2025/02/11 最終アクセス)。

8) 株式会社 NPO スウィング web サイトには、「あらゆる枠を超え、誰もが当たり前の<人>として、同じ時代、同じ社会に生きる人間同士として、出会い、関わり、支え合える社会を足元からつくり続ける」という[<http://www.swing-npo.com/introduction/index.html>] (2025/02/11 最終アクセス)。

9) 「なんでそんなんプロジェクト」の web ページにも「他者の突飛とも思える行動をネガティブに捉えるのではなく、ポジティブに受け入れ「ツッコミ」を入れる。ツッコミによって、多様な人の営みをおおらかに受け入れ「楽しむ」能力を高めます。想像を超える現実を前にユーモアをもってツッコミを入れることのできる人材を育成することが、福祉、教育、医療、のみならず現代の社会全体に有効に働くことになると考えます。」という記述がみられ、面白がれる人の醸成を目指していることがうかがえる。[[https://nandesonnan.com/](http://nandesonnan.com/)](2025/01/21 最終アクセス)